九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ワークショップにおける相互変容と体験理解 : 関与観察とvitality affectの感受に基づいて

笠原, 広一

https://doi.org/10.15017/1544037

出版情報：九州大学, 2015, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式３）

氏　　名　：笠原広一

論 文 名　：ワークショップにおける相互変容と体験理解
　　−関与観察と vitality affect の感受に基づいて−

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本研究は、地域で取り組まれる協同的な表現活動を媒介とした子どものワークショップ実践に関して､関与観察と vitality affect の感受に基づいた体験理解と研究方法を明らかにするものである。

序章で「はじめに」では、子どものワークショップに関する既往研究の現状を考察した。主観的・間主観的な実感を伴った体験理解に関する研究はなく、研究方法も実践概況の事例記述とアンケートを併用した実践報告が多い。近年は差し当たってワークショップとしか言えないワークショップ（高橋,2011）という、目的が曖昧で従来のアート・芸術系や教育・学習系のワークショップ理論からは理解が難しい実践が増えている。しかし、曖昧さをもった実践領域やワークショップ実践の創発性を捉える研究方法や研究視点は十分に検討されておらず、本研究の試みには意義がある。

第１章「ワークショップ研究の再考」では、本研究対象の位置づけをワークショップのジャンルと歴史的展開の中に明確化した。次に 1990 年代以降の子どもと美術・造形表現に関する研究やワークショップの実践理論を検討した。美術系、美術教育系、教育工学系の研究コミュニティから、体験の個別性や一般化しうる方法論や人材育成方法まで幅広く研究がなされている状況が確認された。こうした研究動向から、ワークショップが他者操作的な管理技術として理解される可能性を回避し、実感という体験の内側からの視点に根差した研究方法の必要性が明確化された。

第２章「感性的研究のアプローチ」では、ワークショップ体験を間主観的な実感に根差して捉える感性的な研究視点の理論化を行なった。芸術教育の分野において感性と理性の動的統合、それを越える感性的な体験の可能性（宮脇,1988;1993）が探求されてきた歴史をふまえ、現在行なわれている感性学研究（美学的アプローチ)、感性工学研究（工学的アプローチ)、感性的コミュニケーション研究（質的心理学的アプローチ）の中で、相互的なかかわり合いにおける情動の力動感である vitality affect（Stern,1989）に着目している感性的コミュニケーション研究の理論が本研究アプローチの有効性を理論的に支持しうることが示された。

第３章「vitality affect が媒介するコミュニケーション」では、vitality affect に着目する感性的コミュニケーション（鯨岡,1997）と間主観性（Trevarthen,1979;Newson,1978）の理論の、ワークショップ研究への適用を試みた。明確に判別できない「感じ」として感受される無様式な感覚体験（amodal perception）を媒介するという点で、vitality affect は乳幼児の母子間コミュニケーションだけでなくワークショップ体験にも適用可能であることが論理的に示された。

第４章「vitality affect の検討」ではさらに詳細な vitality affect の検討を行い、情動の力動感の相貌性（Werner,1948)、感情体験の affective な全体性（椎塚,2013)、出来事ではなく体験・情動に着目して相互交流を捉えることで（Stern,1989)、ワークショップ体験の実感がまとまりを持って記述可能であることが理論的に示された。vitality affect に関しては医療、保育、音楽に関する既往研究はあるが、美術・造形表現は少なく、芸術専門分野ではなく日常性の中に営まれる近年の協

同的な表現活動としてのワークショップ研究では、vitality affect に可能性があることが示された。

第５章「体験の実感に根差した研究方法の検討」では、客観科学のパラダイムと情動の接面を重視する接面パラダイム（鯨岡,2012）の関係をふまえ、人と人がかかわり合う臨床実践におけるエピソード記述の有効性を確認すると共に、客観的なビデオ記録に基づくコーディング分析との比較検討による研究方法を提起した。

第６章「ワークショップ体験の動態についての理解」では、自己と環境との相互浸透的（transactional）（Altman&Rogoff,1987;南,2006）な動態とは、客観的な事実と接面の実感のエピソード記述によって、固有性や文脈性を持った感性的体験の動態として捉え得ることを提起した。

第７章「事例研究 絵画表現ワークショップ」のエピソード記述では、描くこの愉しさや没頭が生み出す情動の力動感に身体と心が突き動かされる子どもの姿や、突然目の前の子どもの姿の感じ方が変化する観察者の感受認識の変容が起こることを見いだした。さらに、コーディングでは体験理解の概念が産出され、相互浸透的な体験構造の理解を得ることができることを明らかにした。

第８章「事例研究 映像表現ワークショップ」では参加者がじゃれ合いを楽しむ姿や、作り演じる愉しさに身体が突き動かされる姿に vitality affect の媒介共有が示された。筆者ら大人の視点からはずっと参加できずにいたと思っていた子どもが、実はずっと彼なりのあり方で参加していたことに気づかされる例もあった。物理的に場を共にするだけでなく、間主観的な情動の接面に「接続」することで視点の変容が起こる。生き生きと活動に入り込み、情動的な触れ合い自体を楽しむことで vitality affect の力動感が身体と心に流入してくる作用は、相互変容と場の変容を相互浸透的に生み出す力動性であり、この流入が「充填」というワークショップが持つ作用である。

第９章「観察者視点の４か月間の変化」では学生ボランティアと筆者との関係の変化を省察し、協同実践を通した相互理解の中で観察者の「私」自身の世界がひろげられる人間的理解（津守,1989）がもたらされる相互変容と意味生成の過程が明らかになった。

第 10 章「ビデオ記録の共同検証による観察者視点と意味生成過程の考察」では、絵画表現ワークショップに関して第三者とビデオ記録の共同検証を行ない、同じエピソードに対して新たな体験理解が生まれた。さらに観察者の暗黙の視点が浮き彫りにされ、観察者である「私」の固有な視点の捉え直しが起こった。

第 11 章「総合考察」では、間主観的な実感に根差してワークショップ体験を捉えることは十分可能であり、間主観的な vitality affect の感受によって捉えた体験とはワークショップ体験の「感性的位相」であること、こうした体験理解とは観察視点への自覚と観察者自身の変容を伴う意味生成の過程であり、場に内在する中で「自らの世界がひろげられる」（津守,1989）相互変容と共にあることが明らかにされた。そしてワークショップの体験理解において重要なのは、場の情動の接面に「接続」されることであり、場の相互的な体験の実感の力動感が流入してくることである。それが相互変容を生み出し、場の生成変容を生み出す力動性となる。こうした力動感の流入が生まれることがワークショップ体験の特性であり、この作用は「充填」と呼ぶことができる。

第 12 章「結論」として言えるのは、場に関与する中での実感に根差した体験理解の可能性を示した点、ワークショップにおける相互変容について「接続」と「充填」という体験理解の概念を生み出した点、ワークショップ体験の「感性的位相」を問うことで新たな体験理解とワークショップ研究が開かれることを示した点が、本研究が提出した新たな知見である。

第 13 章「展望と課題」では、実感を伴った体験理解に具体的な研究方法を示した点、今日的なワークショップを捉え直す視点を提起した点が成果であり、感性的体験を捉えるエピソード記述のあり方、研究における体験の新たな表現方法の検討、ワークショップ実践領域の拡張が今後の課題である。